

二〇二六年度

沖縄大学 一般選抜（中期）

「国語」

沖縄大学 二〇二六年度 一般選抜 (中期)

国語

※答えはすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現代の多くの民主国家で許される争いの典型は、ストライキやデモといった非暴力的な訴えである。場面によつては、内部告発や①ソシヨウなどの形もあるだろう。争いの形態がどうであれ、現状維持の慣性に②抗つて「声を上げる」のは勇気があるし、骨が折れる。特に、立場の弱い人にとつて、あからさまに権力に対峙し、異議申し立てをするのは、ただでさえ不安定な自分の地位を③オビヤカすことにもなりかねない。【 A 】人を発言へと駆り立てる力があるとすれば、それは単なる正義感や義憤だけでは説明できないだろう。そこには、時と場所によつて変化する制度的な「所属」とは異なる、より主観的で自分の所属先との一体感を伴う「帰属意識」があるはずだ。

所属や帰属の問題がどれほど多くの争いを生んできたのかは、十七世紀末に思想家のパスカルが記した『パンセ』(一六七〇年刊) が今に伝えている。

「どうしてきみはぼくを殺すのか。」―「なぜって、きみは川の向こう側に住んでいるではないか。友よ、もしきみがこちら側に住んでいれば、ぼくは人殺しになり、きみをこんな風に殺すのは、不正になるだろう。だがきみは向こう側に住んでいる。だからぼくは勇者で、殺すのは正しい」(パスカル、塩川徹也訳『パンセ』(上) 岩波書店、二〇一五年「一六七〇」、七四頁)

ここでパスカルが問題視したのは、所属の違いが争いの原因になるということだけではなく。争いが「ぼく」や「きみ」といった直接の当事者を超えて、「正義」の判定をするその他大勢の④チヨウシュウの帰属意識に下支えされているということだった。ある共同体で対外的な争いの危機が⑤セツパクすると、その共同体内の帰属意識は「燃料」と化して、争いの火を燃え上がらせることになる。

この種の争いの燃料になりやすいのが、愛国教育などを通じた働きかけの対象になる「国家への帰属意識」である。国家や民族といった大きな帰属先は、生活の現場から想像するにはあまりにも距離があるため、メディアを介したプロパガンダの⑥煽動を受けやすい。国家の都合で国民の帰属意識を一つにまとめようとする強い働きかけは、往々にして自国中心主義や他者との争いの火種になる。

社会学の専門家によれば「帰属意識」とは「自分以外の個人、あるいは集団のもっている価値基準、役割、役割期待を自分の意識や行動のなかに内在化させ、同化させる心理的過程」である。ここで注目したいのは、帰属意識が成り立つ条件である。帰属意識は、諸個人と帰

属先の集団との心のつながりがあって初めて成り立つ。【 B 】 帰属意識とは、個人の内面で完結するものではなく、すぐれて関係的な概念なのである。心のつながりが必要としない「所属」と、心のつながりが不可欠な「帰属」との違いはここにある。

会社、学校、バイト先、サークル、SNSなど、一人の人物が複数の共同体に所属できるのが現代である。自分が生まれついた故郷でそのまま育つのが当たり前であった時代、形式的な所属と心理的な帰属はほとんど重なっていた。【 C 】、(1) 個人に自由と権利を付与することで所属の複数化を促し、その結果、社会は流動性を増していく。学校、職場、地域社会など、一人の人間がその長い人生の中で経験する所属先は次々と変わり、住む場所の選択はもちろん、それぞれの段階の選択肢(私立学校か公立学校か、会社員か公務員か)も複数化するというわけだ。

他方で、世界を見渡せば、民族問題や領土問題に象徴されるように、帰属意識のズレや変化が争いの原因になっていることも事実である。こうした争いは、所属と帰属の区別が重要であることを私たちに教えてくれる。というのも、(2) 強い帰属意識は敵対意識の温床になる一方で、争いの激化を未然に抑え込み、問題解決の原動力にもなるからだ。

心理学者であるダグラス・ケンリックは、「所属と帰属の欲求」を「生理的欲求」と「自己防衛」に次ぐ不可欠な欲求として明確に位置づけつつ、「自尊心」や「自己防衛」といったニーズがそれぞれに重なりあいながら、互いを必要とする構造を定式化した。

【 D 】、集団への所属からはじき出された人は「自己防衛への欲求」が危機に晒される。そこで人は集団の一員になることで資源や知識、子育ての負担を分かち合おうとする。²つまり、ケンリックは個々のニーズの充足が本人の満足とは別に進化論的に優位に働くかどうかで欲求の階層が決まるという考え方を導入し、人の行動は、子孫を残せる可能性が高い方を選ぶよう動機づけられていると論じたのである。

ここで押さえておきたいのは、所属・帰属が人間にとって⑦フヘン的な欲求であること、そして、それが自尊心など、より上位のニーズを満たす上での前提になっているということである。集団への帰属意識は、このように争わない社会の基盤的な要素になっている。

所属・帰属の仕方が文化に応じて変わることは、誰でも想像できるだろう。帰属意識とは、自分の属する集団との心のつながりであり、単なる「メンバーシップ」ではないことはすでに指摘した。心のつながりである以上、つながり方は、文化によって多様化する。

文化的側面への⑧ハイリヨは、争いの根本原因を理解するときに極めて重要である。日本の場合を考えてみよう。諸外国に比べて人種的にも文化的にも多様性に乏しいと見なされがちな日本社会は、まさにケンリックの言う「ニーズが依存しあう」社会であった。日本は東洋的な価値観や文化を維持しながら、急激な欧米化の中で自らのアイデンティティを模索してきた。たとえば日本には、個と集団の⑨微妙な関係を表す「甘え」という考え方があり。「甘え」とは、人間関係において相手の好意を求める心理を指し、「相手との分離を拒否し依存する欲求や行動」を意味する。

では、「甘え」は争いとどのように関係しているのだろうか。「甘え」はそれを受け入れる

側から見れば、「依存を許す」ことで、対立の表面化を避けて相手の感情を抑え込む役割を果たす。【 E 】、そこには一定の節度がなくてはならず、節度を越えた甘えは非難やつまはじきの対象になって、争いを生み出す要素にもなる。つまり、(3) 甘えに相当する行動をうまく取り込めている社会では、争いがエスカレートしにくいという仮説が成り立つ。

「甘え」の概念から独自の日本論を展開した土居健郎は「義理も人情も甘えに深く根ざしている」とした上で、「人情は依存性を歓迎し、義理は人々を依存的な関係に縛る」と喝破した。土居によれば、日本では遠慮が働く「外」と、遠慮がいらぬ「内」とがある。「甘え」は内と外を分ける境界線の⑩曖昧さを捉えた概念というわけだ。

人間が互いの力を求める理由には、「仕事」のように社会分業の観点もあろう。ここで見る文化や感情は、自分の属する集団との心のつながりを基礎づける要素であり、この点に関して土居は、「甘えは他を必要とすることであり、個人をして集団に依存させることはあっても、集団から真の意味で独立させることはあり得ない」と分析している。もともと個人の自由を強調する欧米では、社会の基盤はあくまで自立した個であり、集団を個の集まりと見なす傾向が強い。集団と個人の境目は比較的明確であるために、欧米では日本語の「甘え」に相当する⑪ゴイが発達しなかったというのが土居の見立てだ。

「甘え」は、無礼を許す領域を確保して争いを吸収する文化的な工夫と見ることもできる。戦後日本の各地の農村を歩いた宮本常一は、同じ人間がずつと顔を合わせている伝統的な集落においては、日常生活がいたって単調で、のびのびとした人間性が押しつぶされる傾向があることを指摘し、「無礼講」の習慣が解決策になっていたとした。祭りや⑫招宴の場が「人々の集まりによって人間のエネルギーを爆発させる」機会になっているという分析である。こうした「爆発」の機会が、日本各地の農村社会で、そこかしこに用意されていたのは、閉じた依存関係の息苦しさに対処し、争いの激化を抑制するための何らかの仕掛けが必要だったからであろう。【 F 】「甘え」を通じたエネルギーの放出は無用な争いを予防する一つの文化的工夫であると考えてよいし、実は甘えの存在そのものも帰属意識の存在を前提にしていることが分かる。

個と集団の関係に見られる「甘え」は、一見すると自分の所属にあぐらをかいて、そこから節度を越えたレベルのものを引き出そうとする迷惑な行為である。だが、場面に応じた甘えの⑬キョヨウは、ストレスの分散と帰属意識の⑭醸成に役立つ。たとえば(4) 近年増加する孤独死の問題は、個人が家族や地域の共同体に頼れなくなっているという意味で日本人が「甘え」に対して不寛容になってきていることの表れではないだろうか。甘えは、個人と集団の境界線が重なる部分で働く。それは、閉じた依存関係が日常であったかつての日本社会で、争いを防ぐための「あそび」の空間であったのだ。

※佐藤仁『争わない社会 「開かれた依存関係」をつくる』（NHK出版、2023年）に所収。作問にあたり一部を改変・中略した。

問一 傍線部①から⑭に、漢字はひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【A】から【F】にあてはまるものを次の中から選んで入れなさい。

【もちろん ところが たとえば つまり このように それでも】

問三 (1)「個人に自由と権利を付与することで所属の複数化を促し、その結果、社会は流動性を増していく」とあるが、次の(ア)～(エ)において、「社会が流動性を増していく」という根拠として筆者が指摘していることで、適当なものには「○」を、不適当なものには「×」をつけなさい。

- (ア) 生まれ育った共同体に帰属しているという意識があるから
- (イ) 個人としての資格や技能を重視する時代であるから
- (ウ) 交通機関や移動手段の発達が劇的に高まったから
- (エ) 所属する集団への愛着で生活意識が高まったから

問四 (2)「強い帰属意識は敵対意識の温床になる一方で、争いの激化を未然に抑え込み、問題解決の原動力にもなるからだ」とあるが、争いの激化を未然に抑え込む理由について、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問五 (3)「甘えに相当する行動をうまく取り込めている社会では、争いがエスカレートしにくいという仮説が成り立つ」とあるが、文章中の表現を用いて一〇〇字程度で、仮説が成り立つ論拠を説明しなさい。

問六 この文章の(4)「近年増加する孤独死の問題は、個人が家族や地域の共同体に頼れなくなっているという意味で日本人が「甘え」に対して不寛容になってきていることの表れではないだろうか」とあるが、それについて、あなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。その際、「争わない社会」、「依存関係」の二語を用いること。